

ある青嵐(二)

この世に変わらぬものなどありはしないのだ、と、インドの高僧に諭されたのはいつの日の事だったか。

私達は日々成長していく。変化こそ生の証ならば、初めから、全てが間違っていたのだ。

人の想いの、変わらぬ事を願った日々の全てが。

一

二月。

それは、重く冷たい雲のたれ込める寒い日だった。オーケストラの練習からの帰り道、私は顧問であり常任指揮者も務めるブラウン教授に呼び止められた。教授は、一度音楽棟（ロバート・ホール）を出た私を再び彼の研究室に招き入れ、それまで想像もなかった事を提案した。

「今年の冬の定期演奏会ね……サブ・プログラムにチャイコフスキーのヴァイオリン協奏曲をやってみたらどうかと思うんだがね？」

チャイコフスキーのヴァイオリン協奏曲と言えば、そこそここのヴァイオリニストならば一度は弾いてみたいと願ひ、挫折する曲のひとつだ。一八七七年、この曲を完成させたチャ

イコフスキーは、当時ロシアで最も高名であったヴァイオリニスト、レオポルド・アウアーに楽譜を送ったが、「演奏不可能」だと初演を拒絶されたという。チャイコフスキーはピアノ協奏曲でもソリストに「指が折れる」と言われた逸話があり、彼の書くコンチェルトのソロ・パートの難易度は高い。

これまでとは全く異なった選曲に私は驚いたが、同時に、ソリストの演奏を目前で見られる好機に胸が高鳴った。それで、喜んでこう返した。

「それは面白い企画ですね。交響曲をやるのとは違う訓練も必要ですし……一般にコンチェルトのオーケストラパートは小編成ですが、チャイコフスキーならフル・オーケストラでも大丈夫です」

ブラウン教授は、何故か少し驚いた表情を見せたが、すぐに笑って話を続けた。

「そうなんだ。協奏曲では、美しいピアノニッシモ、ソリストに常に合わせる耳やリズム感が要求される。うちのオーケストラは元氣よく鳴らす事は得意なんだが、いまひとつ細かい調整が苦手だ。こんな機会は滅多にないから、是非やれるものならやってみたいと思っているんだよ」

私も常々そう感じてきたので、特に異論はなかった。協奏曲のオーケストラは、楽譜はそれほど難しくないものの、上手く演奏するのは難しい。特に管楽器は強い自制を要求されるので、気持ち良く吹き鳴らしがちな団員達には良い訓練になるだろう。

問題があるとすれば、何回ソリストと合わせられるかで、プロなどを呼べば予算の関係上少ない回数で合わせざるを得なくなる。専科生の中にチャイコフスキーを弾ける者がいるならば有難いが、彼とてそれ以外の勉強も必要だろう。チャイコフスキーのソロをこなしながら、通常の課題もこなせる学生が居るかどうかが、鍵になりそうだ。

私は、教授の提案に何の疑問も抱かず、それを口にした。「しかし、ソロには誰を呼ぶのですか？ 何分、初めての経験ですし、出来ればプロではなく、回数を沢山合わせられる専科生の誰かに引き受けてもらえたら、と思います。チャイコフスキーのソロが弾けそうな学生がいると良いのですが……」

「居るじゃないか、目の前に」

「……は？」

「何か勘違いしているようだね、チエトウインド。我がクイーンズベリ交響楽団の定期演奏会なのだから、勿論ソリストも団員がこなすのだよ？ チャイコフスキーが弾ける学生なんて、現時点では君以外に居ないだろう」

一瞬、私は視界が暗くなるのを感じた。

「ちょっと……待って下さい！ それは無理です！ 私のヴァイオリンなど、趣味で続けてきた程度のもので……」

だが、ヴァイオリン科のミス・エヴァンスは、今年之最優秀奏者は君だと言っているよ。勿論、君は専科生ではないから、そう公表するわけにはいかないがね。彼女の個人的な感触では、

教えた通りの演奏しか出来ない専科生よりも、君の方がほど熱意も素質もある、と」

去年の秋から新しく音楽科の講師に名を連ねたミス・ミツコ・アグネス・エヴァンスは、私の現在の選択音楽の先生である。第六学年に進級し、本来芸術系科目をとる必要のない私を引き受けて下さった恩師だ。

ミス・エヴァンスはローマ音楽院の出身で、このクイーンズベリに来るまでは音楽院の同期と組んだカルテットの第一ヴァイオリンを弾いていたという。そのまま演奏家への道を進む事を断念したのは、ご実家の都合と、自分は演奏家の原石を見抜く力、教える方に素質があると悟ったからだと言うが……

「ミス・エヴァンスのお気持ちには嬉しいですが、おそらく先生の仰りたかった事は、私の演奏があまり型にはまっていない、ということなのではないかと思えます。専門教育を受けていない分、あまり形式を知りませんので……。先生はご自身があれほど自由な演奏をされる方なので、私の未熟な演奏に面白みを感じられたのでしょうか。ですが、チャイコフスキーのソロは私には技術的に無理です」

まだ十分に若いミス・エヴァンスの笑顔を思い出して、私は彼女ならそう言いそうだな、と思った。現在音楽科に所属する教授、講師の中で、一番の奏者は誰かといえは私は間違いない彼女を挙げる。それは、つい一年前まで現役の演奏家であった、という時間的な問題だけではなく、彼女の音楽が

自然であり、自由だからだ。

だがその分、ミス・エヴァンズには技術よりも表現力を重んじる傾向があった。勿論、専科生には技術も含め厳しい指導をしているだろう。だが、完璧でミスのない演奏より、少々ミスがあつても表現したい事がはつきりと現れている演奏に高得点をつける傾向があり、判断の基準が明確でない、と音楽部長より注意を受けて何日も争つたこともあるという。

いずれにしても、彼女の評価は私の表現に対してのもので、コンチェルトを一曲弾き切るといふのはそれだけで何とかなるものではない。ミスター・ブラウンもコントラバスの演奏家であるのだから、そのことは良く分かっている、と思うのだが……

「うん、彼女もそう言っていたね。今の君には無理だと。でもね、半年あれば弾ける、とも言つたよ。舞台上に立てるよう、自分が鍛えてやる、と」

ミスター・ブラウンが満面の笑みでそう言い切り、私は全身の力が抜ける思いを味わつた。

そう……彼女がそう言うのなら、もしかしたら出来るのかも知れない。

だが、その間、自分に試験勉強をする時間は与えられないのか？！

思わずついた溜息が聞こえてしまったのだろう。ミスター・ブラウンは軽く声を上げて笑つた。

「まあまあ。そう深刻にならなくてもいいよ。別に無理強い

するつもりはないんだ。君が本当に無理だと思ふなら、この話はなかつた事にしてもいいし、専科にいい学生がいたら頼んでみていい。でもね、私は、君のチャイコフスキーを聴いてみたい、と思うんだ。君も……おそろく、ここを出たら、吾息にオーケストラで楽器を弾いている時間はなくなるのだろうか？」

ここを、出たら。その言葉は、瞬間、私の心臓を射抜いた。好きなヴァイオリンを弾くくらいの事は、これからもずつと出来ると信じている。だが、私が一番好きな、オーケストラで弾く機会がそう簡単に与えられるとは思わない。……ましてや、ソリストなど。

ミスター・ブラウンが何を思い、彼にとつても冒険であるに違いない提案をしてきたのか、その理由の一端を私は漸く悟つた。同時に、且頭の熱くなる思いを味わつた。

有難い、と思う。だが、不安は尽きない。学業と両立出来るのか自信はないし、何より、本当にあの難曲が自分に弾けるのか、想像もつかないのだ。

黙り込んでしまった私の葛藤を悟つたのだろう、ミスター・ブラウンは、今日返事をくれなくても構わない、と笑つた。

「それに、まあ、もし十月ぐらゐまでにならざる目処がたなければ、その時にプロのソリストを探すという手もあるよ。それこそ、ミス・エヴァンズに責任をとつてもらおう、という道もあるしね。なにしろ、太鼓判を押したのは彼女なんだから」
「そんな、責任だなんて……」

「いや、そう言えば君を必死で鍛え上げるかも知れないよ」
あの厳しい言葉の鞭が容赦なく飛んでくる様が目に浮かぶ。間違ひなく、試験勉強の時間など与えられないだろう。

Aレベルテストさえなければ、と簡単に煽てに乗つてしまふ自分に苦笑した。いや、煽てであつても本当は構わないのだ。何もかも忘れて音楽に没頭する事が許されるなら、どんなに幸せだろう。

ふと、全く別に考えていた事を思い出した。私は、今年のうちにAレベルテスト三科目のうちいくつかを受けるつもりでおり、その準備も今進めている。もし、六月の試験で好成绩を修めることができたなら……そうなれば、六月以降は文字通りチャイコフスキーに専心する事ができる。

一度具体的な形を描いてしまつた都合の良い未来は、圧倒的な魅惑を放つて私の目前にちらついていた。このような機会、そう簡単に与えられるものではない。そう自分に言い訳し、部員の了承がまず先である事を再度確認して、私はその有り難い申し出を受ける事にしたのだつた。

二月の二週目に入り、長期休学していたアイオロスが漸く登校する、とハウスマスターから連絡があつた。冬休み中の

事故で足を骨折していた彼は、松葉杖の補助を必要としなくなるまで自宅学習の形をとり、そのことは同学年の皆に此かの違和感を感じさせていた。彼ならば、多少の怪我はものともせずに登校するだろう。それが適わぬほどの怪我なのか、と憶測は静かに広まつていた。

私は休み明けに、直接彼の弟であるアイオリアにアイオロスの容態を尋ねた。アイオリアは何度も大した怪我ではない、と繰り返して、そして、決して見舞いなど来ないように、との彼の伝言を私に伝えた。

ただの休学ではない。その時、咄嗟にそう感じたが、そのあまりに彼に対して失礼な想像に、私はすぐにその考えを打ち消した。

私と顔を会わせたくないから、登校しない、などと。

アイオロスは、そんなに軟弱な精神の持ち主ではないだろう……

そうして、私は最も見たくない現実を目を塞ぎ、彼の帰寮を待ち続けた。

最後に姿を見たのは、演奏会直後のレセプションの席だ。だが、最後に彼の目が私を見たのは、それより数週間前に遡る。不安はあつたが、それよりも、再び会つて話が出る喜びの方が大きかつた。

そう。その時は確かに、話が出る事を信じて疑わなかつたのだ。

その日、彼は、いつも通りの飄々とした風体で現れた。ゆつ

くりとした歩みだけが、彼がまだ怪我人である事を思わせる唯一の証だった。ダイニング・ルームでカミュ・パロウを取り巻いていた居心地の悪い空気を敏感に察した彼は、シニカルな笑みを浮かべ、たつた一言でその空気を遮断した。カミュの今置かれている立場など、殆ど知らないのだから。胸が熱くなり、私はアイオロスの名を呼んだ。

『アイオロス』と。

その瞬間、私が目を背け続けてきた、最悪のシナリオが動き出したのだ。

一瞬、私は我が耳を疑った。今の声は、私の空耳だったのかと。きちんと、アイオロスに届くつもりで発した声は、私の耳には十分な音量に聞こえた。だが、実は小さく掠れて届かなかったのではないか？ アイオロスの周囲には、彼を慕うミロやアイオリア、それに同学年の仲間達が集まりつつあり、今や数人の声がざざめく場となりつつあった。

だが、それでも、これまでアイオロスが私の声を聞き逃した事などなかったのに。

ややあって、彼の側にいたカミュがこちらを振り向き、その氣遣わしげな眼差しで、私は何が起こったのかを悟った。

そんな馬鹿げた疑いを抱けるほどに、アイオロスは完璧に私を無視したのだ。

アイオロスの屈折の理由がわからない。

話し合えばわかる、と思ったのは、私の間違いだったのか。何度も目問し、その度に、その声に抗う。

彼自身が、初めからそう言い続けてきたのだ。続けていくには、努力が必要だと。

今の彼の態度には、その努力の欠片が見つかからない。私は初めて、アイオロスの頑さに激しい怒りを覚えた。自分以外の人間に、これほどの不満を感じたのは初めてのことだった。確かに私は、彼を傷つけたかもしれない、だが、私が負ってきた傷は、一体彼にはどれほど見えているのだろうか、と。

自室に戻り、ヴァイオリンだけを携えて外に出た。一人になって頭を冷やさねば、とても人前に立てる状態ではなかった。

外へ出たものの行くあてもなく、結局足はロバート・ホールへ向かう。一列に並ぶ小練習室の、一番奥の部屋を開けて中に入り、漸く、固く握りしめていた拳を開いた。

思い出す度に、冷たい嵐が胸を吹き荒れるのを感じる。

滅茶苦茶にバガニーニを弾いて、ついにA線が切れた。一番高かったA線……それは、去年の誕生日にアイオロスから送られたアレゼントの最後の一本だった。

すり切れた弦が、まるで今の己を思わせ、もう、弦を張り替える気力もなかった。

彼の望むように、応えればよかったのか。

体が恐怖に痺れ、指一本動かす事もままならない、そんな状態でも、まだ欲しいと強請ればよかったのか。

そうすれば、その意思だけは汲んで貰えたのか……

去年の十一月三十日。おそらくアイオロスにとつても最悪の誕生日であっただろうその日、全ての鹵車が狂い始めた。

アンソニーに秘事の現場を発見され、凍り付いてしまった私の体に再び熱を呼び戻すべく、アイオロスは熱心に私を愛した。その愛撫に全く応える事の出来なかつた私は、確かに、彼の心をひどく傷つけたのだろう。だが、私もまた傷ついていた。

何故、この恐怖を分かつてもらえないのか。

アンソニーを疑うわけではないが、今にも、教官達の荒々しい足音が聞こえるような気がして、身も心も凍んだ。

放校になるかも知れない、などという現実的な危惧ではなかつた。ただ、今のこの現場を——同性に組み敷かれて喘ぐ自分の姿を教官に目撃され、ヘッドマスター以下の目の前で尋問される、その事自体に抑え切れない恐怖を感じた。

アイオロスをあまで怒らせたのは、その覚悟のなさだつたろう。人目に恥じる事も、人道にもとる事もしていないのに、何故怯えるのか、と。

裏を返せば、秘密の恋なら良くて、暴かれてしまったら駄目なのか、その程度のものなのか、と言いたかつたのに違い

ない。

彼のその信念は分かる——でも、私の戸惑いも理解して欲しかつた。

彼と交わる時、私は自分の生まれ持った性を殺す。今更そこに罪悪感は抱かないが、その間には、自分が自分でないような、独特の浮遊感と、これまで男性として生きてきた核を塗り取られたような心もとなさを感じる。それは彼が愛してくれる事によつてこそ埋められるものであつて、教師や一般の学生の前では決して補われる事のない空洞だ。

自分の核を失つて毅然と彼等に対峙出来るほど、私は強くない。

初めて、本気で、止めて欲しい、と願つた。恐怖に辣み抗う事は出来なくとも、それは冷たい汗となつてアイオロスの決意に水を差した。

快楽も恐怖も、己の意思で制御する事は難しい。それを知つてゐるからこそ、アイオロスは傷つき、私は許して欲しいと願う。

だが、その間をつなぐものが、彼の言う、継続のための努力ではなかつたのか。

私は、何か、彼の言葉を誤つて理解していたのだろうか

……

「エセルバート」

「こつこつ、と練習室の窓を叩く鈍い音が響き、私は我に返つた。ドアを振り返ると、ちいさなガラス窓から見知つた女性の顔が覗いていた。

ミス・エヴァンズは、私の事をミドルネームで呼ぶ。チェトウインド、というのは堅苦しいし、エセルバートという名前が素敵だからだ(註)には光り輝く、などの意味がある、と以前許可を求められた時に説明された。あまりミドルネームで呼ばれる事には慣れていなかったたので、最初は奇妙な感じがしたが、今ではすっかり定着している。

慌てて椅子から立ち上がり、ドアを開けると、彼女は笑いを堪えた表情で入室してきた。

「優等生でも怒る事はあるのねえ！ さっきのパガニーニ、とても君の演奏とは思えなかつたわ」

防音設備が整っているはずの練習室の音が何故彼女に聞こえたのか、私は咄嗟に訳がわからず呆然と彼女を見つめた。

「ああ、この部屋ね！ 私のラボの隣でしょ。実は、排気口から音が漏れてくるのよ。折角高い防音壁貼つてるのに、あんな大きな穴が空いてるんだもの、意味ないわよねえ」

腰に手をあてて笑う彼女を眺めながら、私は冷汗が背中を伝うのを感じた。つまり、彼女は、本当にあの無茶苦茶なパガニーニを聴いていた、というわけだ。怒りに任せて弾き殴つただけの、騒音のようなパガニーニを。

「いえ……その……すみませんでした。先生の邪魔をするよう

な音で……」

「そつね。でも安心したわ。いつものお上品な音だけじゃ、チャイコフスキーは弾き切れないわよ」

ミス・エヴァンズはふと真剣な眼差しになって、私がまだ手にしていた弦の切れたヴァイオリンを見つめた。

「エセルバート。君、今度のチャイコフスキーは別の楽器で弾きなさい。君のそれ、アマティは勿論世界が認める名器だけれど、チャイコフスキーには向かない。オーケストラと張り合うには、もつと腰の強い音が必要よ」

つい先刻まで、音楽の事など欠片も考えていなかった私は、突然の提案に咄嗟に対応する事ができなかった。私のアマティは実家に伝わるもので、ストラディバリ、グアルネリと共に名器と並び称されるものだ。本来一介の学生が趣味で弾くような楽器ではない。カノンがヴァイオリンに興味を示さなかつたためこうして私が独占しているが、このような名器の他にまだ別のヴァイオリンが欲しいなどと、とても父に言える事ではなかつた。

彼女もまた、私に自由になる資金があると思つているのかも知れない。

これまでも何度も繰り返した話を再度始めようとしたとき、彼女は笑つて私のアマティを指差した。

「もつとも、交換条件があるんだけどね。……私の友達に、ヴァイオリン職人がいるの。腕は折り紙つきなんだけど……ちよつと、オタクなのよね。貴方がかなり保存状態のいいアマティ

を持つている、という話をしたら、すっかり舞い上がっちゃって。その楽器を暫く彼に預けてくれるなら、チャイコフスキーにピッタリの楽器を貸し出してくれるそうよ」

「いえ、ちよつと待つて下さい。この楽器は正式には私の名義ではなくて……」

「勿論分かっているわ。いくら君でも、十六そこでアマティを所持しているなんて思っていないわよ。でも、ヴァイオリンは調整が必要よ。ちよつと長期のドックに入れておくと思えはどうう？」

矢継ぎ早に繰り返される彼女のプランに私は少し圧された。部員ほぼ全員からの承認を受けて、私がチャイコフスキーのソロを弾く事が決まったのがつい先週の土曜日のことだ。それから、まだ一週間も経たないうちに、彼女はもうそんな手配までしていたのか、と。

一瞬、父の渋い顔が脳裏を霞めたが、私の心は既に決まりつつあった。

ミス・エヴァンズが、この楽器ではだめだと言うのなら、きつとその通りなのだ。

確かに、アマティは古典、バロックあたりの小編成には適しているが、三百年も前の楽器であるため、ロマン派以降の大編成オーケストラと共演するには出来ていない。無理をして楽器に変な癖をつけるよりは、編成に見合った楽器を使う方がよいのだろう。

私は、その交換条件についていくつか確認したあと、結局

彼女の提案を受け入れた。新しい楽器の調整が終わるまで、三週間ほどかかるという。

その間に、君をそこまで怒らせた相手と和解しておきなさいね、と釘をさされ、私は今まで飲み込んできた溜息を思わず吐き出した。

和解といつても、こうまで徹底的に避けられている状況はどうすれば良いのか。

人前で、無理矢理捕まえて話せば、質問には応える。今晚ちよつと話があるから、部屋で、と言えば領きもする。だが、実際に消灯までに部屋に戻って来た事はなく、どうして私を避けるのか、との問いには『避けていない』の一点張りですれ以上の質問に応えない。

消灯後は規則を盾にとり、さっさとベッドに入って話をしようとしてもしなかつた。

身勝手だと怒る事はできる。消灯後に人を起こして、深夜に行為に及んでいたのは一体誰なのだ、と。だが、そう怒りが全身を支配する前に、痛みが胸を貫いて何も言えなくなるのだ。後姿から感じるはつきりとした拒絶の意思、あの合理的な彼が己の自己矛盾を隠そうともしない事実。

アイオロスは、形振り構わず、私から離れようとしていた。昨年十二月、何度も委節の理由を尋ねた私に、ただ一度だけ、彼は逆に質問を返した。『お前俺達の関係を今、親に話せるか』と。

私は、咄嗟に答えられなかった。YES、と言えどどうなるのか。彼は間違ひなく電話ボックスまでついて来て、私に父にはつきりそう告げるのを聞くまでは納得しないだろう。では、NOと言えは？

アイオロスとの関係をいつまで続けるつもりなのか。

先延ばしにしつづけてきた問題に、アイオロスが今決着をつけるつもりである事をはつきりと思ひ知らされた。

もう少し、時間が欲しい。それは偽らざる私の本心で、彼と続けていきたいからこそ慎重にならざるを得なかつたのだが、アイオロスはそれを優柔不断と取つた。それ以後、二度と私の話を耳を傾けようとせず、私の質問に答える事もない。

冬期休暇の間に少し烈気が収まっていれば、と淡い期待を抱いていたが、それも無駄だつたのだと思ひ知らされた。

私の答えが出るまでは、この状態を変えるつもりはない、ということか……。

けれど、何をどのように考えても、今私達の関係を明らかにする事に利点はなく、困難ばかりが立ち塞がる。どうすれば良いのか、答えは見つからぬまま、徒に日々は過ぎていった。

二

三月。

スミスハウスの第四学年を騒がせたダンス大会が意外な結果に終わり、すこしざわついた雰囲気が見え内部を支配していた。アイオロスとの関係修復には全く進展がなかつたが、私にはもう一つ、新たな懸念が増えていた。

オーケストラの後輩でもある、カミュ・パーロウのことだ。ダンス大会以降、彼は普通の生活を何とかこなしていたが、大会での棄権を気に病んでか、常ならば隠しようのない存在感が薄れ、自信を喪失しているように見えた。

彼がクイーンズベリに入学して二年。既にカミュは将来の幹部候補と目されている。カミュの不調は、実は密かにオーケストラの上級生の注目を集め始めていた。

彼がそもそも、ダンス大会代表戦の代表を引き受けたのはミロを矢面から外すためだ。男子三人兄弟の次男であるカミュは、おそらく、幼い頃からそうして他の二人が嫌がる役目を引き受け、母親を助けてきたのだろう。そこまでは彼らしいと言える行動だったが、当日のカミュの姿はそれだけでは説明出来ない、ある種の決意を感じさせるものだった。

これは、と目を見張つた時、その事件は起こつた。カミュ